

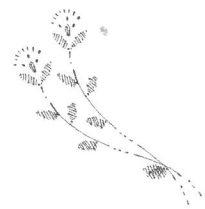
人とつむぎ、 織りなす日々のなかで 高齢期の発達

第5回 自分で考えました

7月号のマチコさんは、数年前まで余暇時間に刺し子をして過ごしていましたが、最近はしなくなりました。気持ちの伝わる手紙を書くマチコさんですが、手紙も書きたがらないそうです。その一方で、しごとである織物に対しては、90歳代になった今でも新しいものに挑戦したい思いを語っています。余暇時間や手紙に見せる変化ばかりに注目すれば、しなくなった、できなくなったばかりの姿にみえますが、しごとへの意欲から考えると、しごとに力を注ぐために自ら調整しようとしているように思えます。会話のなかでも、散歩で疲れたら、自分で休むと答えているマチコさんですから、体力の衰えを実感しながら、大好きな織物を続けるにはどうすれば良いか考えているのでしょうか。

「自分で考えました」

さて、自分のしごとが大好きで、「糸絵」と名づけられた



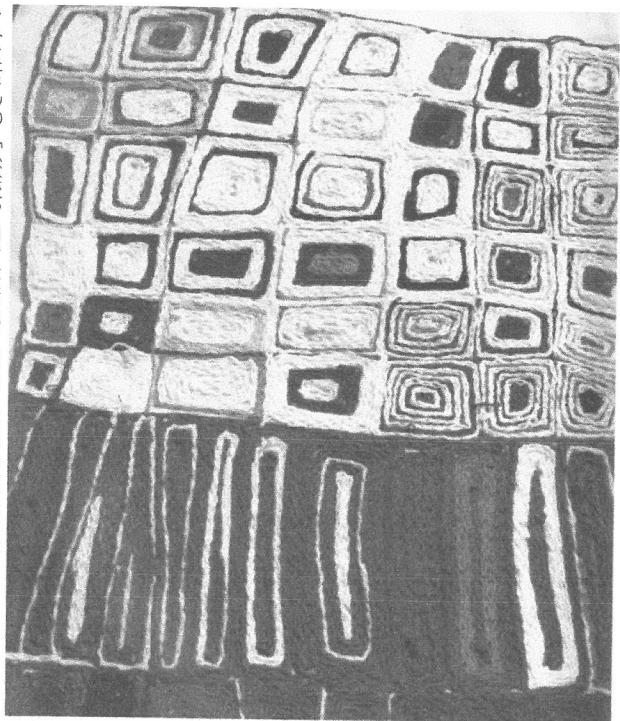
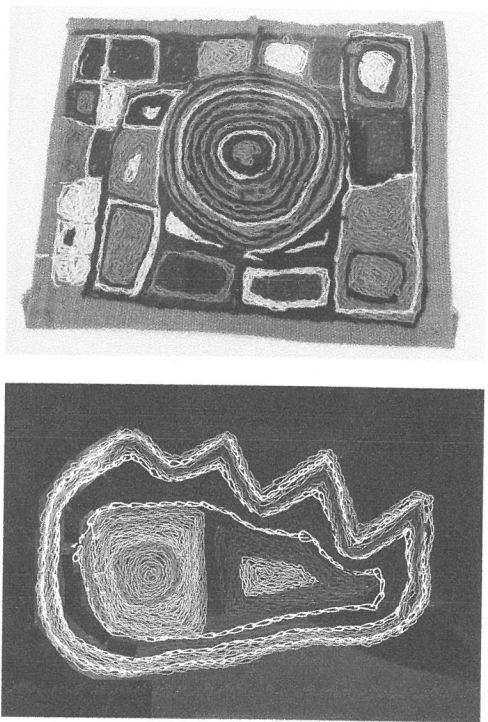
張 貞京

ちゃん ちよんきよん/京都
文教短期大学准教授。共著
に『保育者のためのコミュニ
ケーション・ワークブック』
(ナカニシヤ出版)。

刺しゅう作家として活躍してきた80歳代のトミさんの話をしたいと思います。これまで登場したナツコさん、ユミコさん、マチコさんは、文字で気持ちや考えを綴りますが、トミさんは文字を書くことがむずかしいようです。

自分の名前なら、ひらがなで書いて、笑顔で読み上げてくれます。遠くに離れて暮らす家族への手紙は、職員がトミさんと話しながら書いた文字を、トミさんが上からなぞりまです。大好きな鳥や魚など、動物の絵を描き加えることもよくあります。

私ともみじ・あざみに通い始めた頃に出会ったトミさんは、いつも工房の入り口に近い椅子に座って、刺しゅうに集中していて、話しかけられると「こんにちは。お元気ですか？」と朗らかで美しい声で話してくれました。刺しゅうの下絵について、誰が考えたものかと尋ねたところ、「自分で考えました」と誇らしげに話し、下絵の「鳥が好きです」と



トミさんの「糸絵」。白、群青色、藍色…穏やかな色合い

教えてくれたのが印象的でした。

トミさんは、自分で描いた下絵をチェーンステッチという刺しゅうですき間なく埋めていきます。刺しゅうを始めてから30年近く、一日中、続けていても、楽しくて仕方がないといった感じで熱中してきました。しごと時間が終わっても、刺しゅうをしていることもよくありました。一針一針を並べていく集中力に驚かされます。表現されるものは、丸や四角、大好きな鳥や魚、チューリップ、ときには太陽も登場します。途中から下絵とはちがうものになっていくこともありますが、完成した作品は、刺しゅうが大好き、動物が大好きというトミさんの思いであふれているように感じます。

50歳で花開く

トミさんは関東の方から、当時のあざみ寮に10代後半で入寮しました。体も弱く、歩くことはできるものの、階段を這って昇り降りしていたそうです。体づくりをしながら、仲間とともにしごとと暮らしにとりくんでいくなかで、トミさんは穏やかに行動する大人へと成長していったといいます。

幼少のころから、トミさんはお母さんが手芸品を作っている姿によく接して育ったそうです。入寮後の帰省のたびに、手芸用の糸や針を家から持ってきては、袋のようなものを作っていました。

モノづくりに興味をもっていたのもあって、入寮後は工房に所属して、織物やむすび織の全工程に必要な作業に仲間とともに参加し、むすび織を覚えていきました。それから何十